

クイテンの戦場はどこか —元史に基づく研究—

The location of the Battlefield of Khuiten —Study based on The Yuan- Shi(The History of Yuan)—

2019年11月11日第3改訂
(山名とアラルの位置追加)

安田公男

URL : chinggis-ff.jp

1. はじめに

テムジンが遊牧部族を統一する過程に置いて、クイテンの戦いは大きな節目となったものであった。敵は西のナイマンと北のメルキトという大部族にジャムからの東方部族にまで広がったが、テムジンはオン・カンと協力して勝利した。残る敵はわずかとなり、全土の制覇が見えて来たのも東の間オン・カンとの内部争いが起き、二年間の苦闘を切り抜けてテムジンはチンギス・カンとなった。その端緒となった戦いだったので、いずれの史書にもかなり詳しく書かれている。史書には、元朝秘史、集史、元史、元聖武親征録と四書あるが、最初に大きな注目を集めたのは何と言っても元朝秘史であった。だが、戦いの生起年や敵方の構成内容などに矛盾や脚色が多く、この戦いを深く知る資料としては信頼度に欠けると現在では考えられている。他の三書には大きな部分で共通点があるが、目につく相違点が多岐にわたる。集史以外の三書にはクイテンとあり、集史にもその名はあるが、大興安嶺山中の地名が戦場として上げられている。現在の研究状況としては、比較的細かく述べている集史に基づいて論じられることが多いが、元史と元聖武親征録には見逃せない記述が多くある。本研究ではこれらに注目して戦いを考察する。

2. 従来の研究

近年の研究では、先ず吉田順一氏の論考が挙げられる(1)。戦闘に至る過程や、各部族の勢力関係について元朝秘史(秘史と略)を他の三書と比較して詳しく分析した結果、秘史が史書としての信頼性に乏しいことを明らかにした。戦場については、ウルクイ・シルケルジト河近くのアラル(aral)塞の近くにクイテンの野があったとする。これは、集史の記述によっているものであるが、具体的な場所には言及していない。

次に、松田孝一氏の説がある(2)。集史によってウルクイ・シルケルジト河近くのカラウン・ジドンの嶺(QJ嶺と略)、即ち現在の大興安嶺山脈で戦いがあったとする。そこに述べられている城壁と元史と録に現れる塞は同じものであり、当時金国がQJ嶺に張り巡らしていた防衛施設の界壕と見なしている。テムジンとオン・カン軍は金国と友好関係があったので、界壕内に入りに来たことは考古学的にも証明されているようである。これは集史、元史、録を総合した論である。

このような両論であるが、集史に記載されている地名が見つかったとの報告はまだなされていない。また、元史と元聖武親征録(録と略)との差についての言及がほとんどない。

3. 史書の比較

3.1 一致点

表1に一致点を示す。年代や部族構成に矛盾のある秘史は除いた。戦いのざっとした流れは分かるが、5の軍を移した先が集史以外で判然としない。これが、未だに戦場が定まらない原因である。なお、ここではテムジンとオン・カンの軍を甲軍と呼び、ナイマンとメルキトにジャムカらが加わった集団を乙軍と呼ぶ。

表1 一致点

	内 容
1	1201年に、ジャムカはオンギラトなどの東方部族からグル・カンに選ばれた。
2	ジャムカは東方部族を率いてテムジンと戦ったが敗れた。
3	1202年の春、テムジンはウルクイ・シルケルジト河から出発しタタルを討った。
4	ナイマンとメルキトに前年敗れたジャムカなども加わって、甲軍に対抗する連合が成立した。
5	甲軍はウルクイ・シルケルジト河から軍を移した。
6	1202年の秋から冬に戦いがあった。乙軍は風雪を祈り、それに乗じて攻めようとしたが、却って自分たちに吹き付けてきて敗退した。
7	ジャムカは敗戦を知り、味方部族から略奪しながら軍を返した。

3.2 集史と元史・元聖武親征録の比較

次表に、秘史以外の三書を時系列的にまとめた。表中の、集は集史の記事で、元は元史と録である。録の内容は元史の内容を少し詳しく述べた形であるので、()内に相違部分のみ加えた。集史中の()と[]書きは、史集の原文のままである。三書は記述の項目配置こそよく似ているが、集史と他の二書では細部が随分異なっているのが分かる。表の後で項目ごとに内容を概観し、疑問点などを上げ、必要な部分に解説を加えた。秘史の記事は全体としては信用できないが、部分的には詳しい所もあるので、論じる上で参考にする。

表2 集史と元史・録の比較

項目	史書	記事内容
A	集	ナイマンのブイルク・カンとメルキトのトクトア・ベキは、ドルベン、タタル、カタギン、サルジュウト諸部及び彼等の首領アウチュ・バートルとオイラト部族の君主クドカ・ベキ（この人物はかつて何度も甲軍と戦ったが、逃げて[後に]グイルク・カンの元に身をかわし、しかも彼と連合するにいたった）等と共に出動し、大軍を伴ってチンギス・カンとオン・カンに対し戦おうとした。
	元	メルキトのトクトアは、ここに至ってナイマンのブイルク・カンと会し、ドルベン、タタル、カタギン、サルジュウト諸部と約して侵攻して来た。（ナイマンのブイルク・カンはメルキトのトクトア・ベキ、ドルベン、タタル、カタギン、サルジュウト諸部と会し、アウチュ・バートル、クドカ・ベキ等に及び、我が軍を犯しに来た）
B	集	甲軍は址克址儿と赤兀[儿]孩地方に偵察所を設けた。兵が一人そこから帰って来てナイマンが接近して来るのを知らせた。
	元	テムジンは騎兵を派遣し高所から偵察させていると、（捏干貴因都、徹児、赤忽児黒の諸山で偵察していると）ナイマン兵がだんだん近づいて来るのを知った。
C	集	甲軍は忽勒灰—昔魯主勒地方より牧を移し、兀惕古の城壁方面に撤退した。その地方は[後の]カラウン・ジドン辺境付近の塔察儿—阿合の禹儿惕である。上述の城壁とキタイ辺境に築かれているアレキサンダーの大城壁は似ている。
	元	帝とオン・カンは軍を移して塞に入った。
D	集	オン・カンの子セングンは陣營の側面に居た。かれは森林に入り、森林をぬけて、[上述の]城壁に行くことが出来た。彼がそこに達する前に、ブイルク・カンが[彼らに気付いて]言った。見ろ、モンゴル部族の者ども。我われはあいつらを一揉みに潰せるぞ。ブイルクはカタギン部のアウチュ・バートルとメルキトのトクトア・ベキの弟クトゥを差し向けた。ナイマン軍とモンゴル諸部よりなる先頭部隊も差し向け、共に前進した。彼等はセングンの元に達したが、闘えず兵を返した。セングンも前進し、兀惕古の城壁に入った。
	元	イラカは北辺からやって来て高山に営を結んだ。ナイマン軍はこれを突いたが動かさないので兵を還した。（ブイルク・カンはこれをあなどり、「あの軍は締りが無い。連中のご機嫌を窺って全部やつつけてやろう」と言った。アウチュ・バートル一行がナイマンに従っており、前鋒と共に戦おうとした。しかし遥かに望んでイラカ軍を動かさないので知り、兵を還した）。イラカは尋ねて塞に入った（我が軍に合流して作戦を練った）。戦いに臨み帝は輜重を他所に移し、オン・カンと阿蘭塞に拠って壁とし、クイイテンの野で大いに戦った。

E	集	当時[ナイマン人は]風雪を呼び起こす巫術をした。その要点は、呪文を念じ各種の石を水に投げると大雨が来るのである。
	元	ナイマンは巫者に風雪を祭らせ、その勢いで進攻しようとした。
F	集	[しかし]この風雪は逆に彼らに向かって吹きつけて来た。これらの山の中から抜けようと思いクイテンの地へ退いたが、そこに落ち込んだ。多くの人知っているように、ナイマンのブイルク・カンの部隊とそれに連合したモンゴル部族は、この地方で厳寒にあつて手足を凍らせてダメになり、大風雪で多くの人畜が高所から転がり落ちて死んだ。
	元	まもなく風向きが変わり、ナイマンの陣を撃ったので、彼等は戦えずに引き返そうとした。雪が谷川を埋めたので帝がこれに乗じると、ナイマンは大敗した。(雪で軍は迷い乱れて、雪で埋った谷川に落ちた。そして逃げた)
G	集	甲軍は aral (意は島) の周辺に駐屯した。この時、ジャムカは彼をグル・カンに推戴した人たちを連れてブイルク・カンと共に来ていたが、このような[惨めな]状況に陥つたのを知り、再びチンギス・カンの元へ向かうために自分を君主に立ててくれた部族から略奪し、チンギス・カンの元に来て恭順の意を示した。
	元	この時ジャムカは兵を起こしナイマンを助けていたが、その敗れるのを見て直ちに兵を返し、道筋にいた、自分をカンに立ててくれた者たちをほしいままに略奪して去った。(時にジャムカとブイルク・カンは未だ合流していなかった。ジャムカは兵を引き返し、自分を立ててくれた者に遇うと全て虜にした)
H	集	甲軍は城壁を過ぎ、阿不只合濶迭格儿の地で冬を過ごした。この冬営地はかつてオンギラト部族に属していた。クビライ・カガンとアリーブカがかつて殺し合いをした所である。少しも水がなく、居民は雪を水にして飲用にする。
	元	一。(冬、テムジンは塞を出て、阿不禮闕惑哥儿の山に駐屯した)

3.3 各項目の概観

3.3.1 項目 A (乙軍の成立状態)

集史での乙軍主力はナイマンとメルキトであり、そこにテムジンに従わないモンゴル系の諸族が集結したとする。録はナイマンが主導者で、そこに他の部族が集まったように書いている。注目すべきは元史で、ナイマンとメルキトは会した、即ち合流したが、ドルベン等の東方諸部族とは約したとある。同盟を約束したが合流はしなかったようである。

3.3.2 項目 B (偵察場所)

集史と録で場所と山名が出て来る。これらは、秘史に出て来る三つの名、エネゲン・グイレットウ地方、チェックチェル山、チクルグウ山に相当するものだろう。集史はこれら全部を地名としている

が、録は山としている。偵察であれば、秘史と録のように山名である方が妥当に思える。

3.3.3 項目 C (移動先)

甲軍が移動する前はウルクイ・シルゲルジト河方面、即ち現在の内モンゴルのシリングルから東ウジュムチン方面にいた。集史では、そこから兀惕古の城壁方面に撤退したとあるから、乙軍に追われたのだろう。退避場所はカラウン・ジドン辺境付近で、後の塔察儿-阿合の禹儿惕だったと詳しい。これらの地名を少し考えて見る。先ず兀惕古は現代漢語で Wutigu である。秘史にはこの戦いのときに、セングム等がウトキアの地で駐営することを相談したとの記事がある。ただの想像であるが、兀惕古はウトキアのことなのだろうか。禹儿惕は突厥語 Yurt で家の意であるが、遊牧部族の牧地または領地の意でもある。塔察儿-阿合の発音については、史集の注に Tajar-aqa とある。しかし二つの地名が見つかったとの報告がないし、識者も言及しない。よほど現在の地名に比定しにくいようである。

アレキサンダーの大城壁はイラン北部にある長城で、北方から侵入する遊牧民を防ぐためにササン朝ペルシャが建造したものである。カスピ海の南端から東に 200km ほど伸びており、現代ではゴルガン(地名)の大城と呼ばれる。だが、古代に作られて来歴が分からなくなってしまった壮大な物はアレキサンダー大王に結びつけられていたので、この名があった。そのような長大な城壁がキタイの辺境にあったという。集史のキタイは遼朝や金朝の領土から漢土の北部を指しているので、アレキサンダーの城壁は、当時金国が張り巡らしていた防衛施設であった界壕と見なされる。従って兀惕古の城壁も界壕そのものを指していると考えられる。一方の元史と録は、軍を移して塞に入ると簡単な記述で、移動した場所も塞の様子も分らない。特別な所に向かえば何らかの言及があるはずなのだが。

3.3.4 項目 D (イラカの行動と塞)

オン・カンの息子について、元史と録はイラカで集史はセンゲンとあるが、秘史では本名がセンゲンであだ名がニルカである。名はさておき、集史では、陣営の側面に居た彼が森を通りぬけ、兀惕古の城壁に取りつこうとするところをナイマンに攻撃され、それを免れて城壁に入ったというから、甲軍本体からそれほど遠い場所ではないようである。しかし、元史と録では、高山に拠ってナイマン軍と接触した後本軍を尋ねたと言うのだから、センゲン隊は遠くにいて孤立していたようだ。彼の行動についての史書の違いをどのように理解したら良いのだろうか。更に、集史の記述のように、まだ城壁に入っていないセンゲンに対しナイマン軍が手出し出来なかったとすれば、城壁内に退避していた甲軍に乙軍が戦いを仕掛けるのはまず無理だっただろう。界壕付近で乙軍が弱るのを甲軍は待っていただけとは考えられず、どのような戦いが起きたのか想像が難しい。一方、元史と録では、クイテンの野で大いに戦ったとあるから、いかにも騎馬民族の戦いと納得しやすい。

元史と録には戦いの前にテムジンが輜重を他所に移したとある。イラカが塞に入った後のことであり、移した後でアラン塞を壁としたとあるから、当然塞の外はどこかに移したのだろう。これを集史のような界壕付近の戦いだっただとするのならば理解できない。なぜなら、輜重も長大な界壕の

中に入れてしまえば安全なはずで、外のどこかに移す必然性がない。この部分の記述は、元史・録と集史では矛盾している。

3.3.5 項目 E,F (風雪を祭る)

巫術をしたことについては各史書共通である。だが、その結果についての集史の記述は他書と大いに異なる。敗兵はクイテンの地で行き止まりになって体力が弱り、人畜とも高所から転がり落ちて死んだとある。一方、元史、録、更に秘史でも、雪に埋もれた谷川に落ち込んで死んだとある。元史・録のクイテンは川であり、秘史もそう思えるが、集史のみ山である。

3.3.6 項目 G (ジャムカの行動)

どの史書でも、ナイマン軍が負けたのを知ってジャムカは兵を返し、自分をカンに立ててくれた部族から略奪しながら逃げたとある。もしも、ブイルク等と共に戦場にあつて敗戦の憂き目を見たのならば、逆風雪にさらされる中逃げるのに精一杯で、自分の仲間の部族から略奪するような余裕などなかっただろう。ということは、ジャムカ等は戦場からかなり離れた位置にいて本軍の敗戦を知ったことになる。ジャムカをカンに立てたのは、ドルベン、カタギン、サルジュウト等の部族であるから、当然彼等も戦いに加わっていなかっただろう。3.3.1で指摘した元史の記述が信憑性を持って来る。

3.3.7 項目 H (戦いの後)

戦いが終わった後、テムジンに秘史で言うアブジア・コデグリの地で冬を越したらしい。集史はそこをオンギラト部族の地であったとするから、やはり大興安嶺山脈の近くである。録の記述では塞からそれほど遠い所ではなさそうである。

4. 考察

4.1 金国の反応

以上のように比較すると集史の内容に数々の疑問が生じた。その第一は、界壕がアレキサンダー大城のように当時既に何百年も放棄されていた城壁ではなく、金国兵が守っていた現役の城壁だったことである。質は決して良くなかったようだが、虜と呼ばれた兵士が防衛任務についていた。乙軍の大兵団が迫って来て、界壕付近ないしはそれを挟んで、甲軍と一戦を交えようとしたのならば、彼等の中に大きな衝撃と緊張が走るだろう。友好部族が負ければ、それを追って敵が金国内になだれ込んで来るかも知れず自らも戦いの態勢に入るだろう。甲軍という味方もいれば守備兵も傍観などするはずがない。中央に知らせれば、正規軍も出動するかもしれない。幸いにも敵軍団が界壕の近くで壊滅したとすれば、例え甲軍の力がその勝利に大きく貢献したとしても、警備兵は自分たちが戦って勝利したと中央に報告して褒章を受けようとするだろう。1996年の完顔襄のウルジャ河の戦いを見ても分かる通りである(3)。そのような戦いであったとすれば金史に記録が残るはずである

が、その形跡がない(4)。これを受け入れると QJ 嶺の界壕付近で戦いはなかったことになる。集史の記述には金国側の動きが感じられない。アレキサンダー城壁と同じような廃墟としての城壁を皇軍が自由に使用しているように映る。

反論として、しょせん遊牧民同士の争いなので、金朝が記録に残さなかったと言うことは出来るだろうか。先に筆者は金史の一記事に関する論考において、クイテンより六年ほど前、撫州にいた完顔匡が撃退した障葛なる賊をジャムカと推定した(5)。事変の大きさはクイテンの戦いよりかなり小さいだろうが記録として残っている。

また、国境近くで騒ぎがあっても記録がない場合もあるだろう。それは、この戦いの年の春にテムジンが行ったタタル部族掃討作戦のようなものである。界壕の直ぐ外側とも言えるべき所で起きた騒乱だが記録が無い。当時金国と友好関係にあったテムジンの作戦行動は金国が了承済みで、かつ害を及ぼすものでなかったから、記録に残すほどではなかったと考えられる。

次に考えられるのは、戦いは実際にあったのだが、金史を編纂した元朝が削除した可能性である。消された例は実際にあり、テムジンの直接の先祖たる萌古斯のたびたびの侵攻がそうであった。事実であったことは、碑文と宋国側の記録から判明しており、元朝の史官が記録に残したくなかったので削除したと考えられている(6)。この戦いも同様に、金朝に助けてもらっていたのを恥じて元朝の史官が削除したのだと考えることもできる。であれば、別の方法で戦いの存在を証明することが、集史に依拠して論じる場合に必要となる。

4.2 高山での偵察

集史以外の史書では、甲軍の偵察場所が高所又は山である。見張るのだから当然高所が良い。何箇所もの地点で偵察しているのは、ナイマン軍の行動をある程度予測しており、積極的に対処しようとしていた表れである。敵を怖がっているようには思えない。山名の内、チェックエル山、チクルグウ山は秘史の他の場所でも出てきて、ホロンバイル地方にあるようである。だが、これをもって、乙軍が QJ 嶺近くまで来襲したとする根拠にはできない。なぜなら、狼煙通信のような情報伝達の拠点だったと考えても良いからである。

ナイマンの行軍記事があるので、他部族の行軍記事にも注目した。すると、甲軍とジャムカ等が移動している記述はあるが、メルキトが移動している記述がどの史書にもない。この戦いまでの数年間に、テムジンとオン・カンとは個別にメルキトと三度は戦っており北方の警戒を怠らなかつたはずである。乙軍の主力の一方なのだから、動きがあればナイマンと同程度に扱うであろう。それが無いのは、メルキトが本拠地から移動しなかったことを意味しているのかも知れない。実際はあったのだが書き漏れているだけだ、と言えないこともないので、ここでは判断を保留する。

4.3 イラカの行動

本戦の前にイラカがナイマン軍と衝突したことは三書共通にある。この軍事衝突の勝敗を付けるのならイラカ隊の勝ちである。なぜなら、彼等はナイマン軍に侮られるほどの少数であり、かつ元史と録にあるように、本体からかなり離れていたのが友軍の助けも得られなかつた。そのような状

況下でナイマン軍の攻撃を諦めさせ、加えて、その行軍状況と力の一片を確認出来たのだから偵察行動として大成功である。イラカは優れた軍事指揮官であり、秘史に描かれている愚かな印象とは異なる。後にイラカはテムジンと対立するから、彼の称賛に繋がる挿話がわざわざ創作されるはずがなく信憑性は高い。イラカの暗愚を強調する秘史にこの話がないのは当然と思える。

元史と録では、ナイマン軍が去った後イラカは父親を探し求めて塞に入ったが、その間敵の妨害を全く受けることがなかったようだ。このことは二つの軍が離れて行っているのを意味している。本戦が迫って来る中、ナイマン軍がどこに向かいイラカ隊がどこに向かえばこうなるのだろうか。前節でメルキトが本拠地を動かなかった可能性を示した。それを是とすると、ナイマンはメルキトと合流するために、その本拠地方面即ち現在のキャフタに向かっていたと考えられる。進軍経路はセレンゲ河に沿った道であろう。他の経路はケレイト領を通るので不可能と思われる。この仮定でイラカの行動を想像すると次のようになる。

——彼は北方でメルキトの動静を偵察していたが、ナイマン軍が来るとの情報でそちらに切り替えた。セレンゲ河の右岸に移り、高山に営を結んで偵察していた。ナイマン軍は彼を見つけて攻め掛けたが、高所過ぎて攻撃が出来ないので諦めてメルキト方面に向かった。その後イラカはケレイト本領方面に南下して父親を捜して塞に入り、ナイマン軍の動静を報告して共に作戦を練った。——

このようであったとすれば、元史と録にあるイラカ隊とナイマン軍の行動が説明可能である。QJ嶺で戦いがあったとすると、乙軍は真っ直ぐ東に向かって来るはずなので、イラカの行動が想像できない。当然塞はケレイト領内にあった可能性が高い。

4.4 塞とは何か

集史説によれば、元史の記述にある塞も金国の界壕のことであり、甲軍はその内側に入って守りを固めていたとなる。だが、4.1 と 4.3 で述べたように、この塞が界壕である可能性は考えられない。それ以上に、遊牧民の戦いでは防衛を全面的に城塞に頼ることなどほとんどない。完顔裏に追われたタタルの一派がウルジャ河付近の砦に籠ったとの秘史の記事や、テムジンに侵攻されたメルキトの一部が砦に籠った例があるくらいである。いずれも多数の敵に囲まれて逃げ場がなくなり、やむを得ず行ったものであろう。このように全くないとは言えないが、ほとんどそのような戦いはしない。不利であると思えば塞に籠るよりも、馬を飛ばして逃げるのが騎馬民族の戦い方である。集史には、乙軍が大軍のように書かれているが、部族数は多くてもナイマンとメルキトが中心だから、実数はせいぜい甲軍と同等だろう。ジャムカ等を入れれば少し多いかもしれない。倍以上いるのならともかく、皇軍は何度も他部族への遠征経験があり勝利を重ねていたのだから怖がるはずがない。その程度の敵で塞の中に引き籠るようなことはしないだろう。万が一塞を頼ったとすれば、甲軍の規模からして確かに金の界壕くらいしかないが、塞を壁としたとの元史と録の表現が界壕を意味していないのは、輜重を他所に移したとの記述で明らかである。長大な界壕の中に将兵ごと輜重を入れれば安全になるのだから他所に移す必然性が全くない。塞とは、今もモンゴリアに遺跡と

して点在する城郭都市のどれかであろう。テムジンの輜重がそこに入りきらないのだから、塞に入っていたのは大部分オン・カンの輜重、即ち家族と財産であろう。塞がある場所はケレイト領内に想定される。塞に頼らざるを得なかったのだから、甲軍がかなりの苦境にあったことは確かである。

4.5 塞の候補

塞を城郭都市と考えればモンゴリアの中央部に多く存在する。ウイグル時代のバイバリク、ハルバルガスのように、当時既に四百年ほど放置されて使用に疑問符が付くものもあったが、まだ使用可能な状態と想像できるものもあった。それは、トーラ河の屈曲点から西に伸びる街道に沿った城郭群である。大きなものとしては東からオラン・ヘレム、チン・トルゴイ、ハル・ブフの三城が有名である(7,8)。当時から二百年前の契丹時代に造られたものであり、契丹滅亡からこの戦いまでは八十年ほどが経過していた。西に向かった耶律大石一行が短期間用いたかも知れないが、その後は勢力を伸ばしたケレイト部族の勢力範囲である。土を版築技法で固めた城壁であるから、手入れをしなければ雨風などの力で徐々に崩れる。だが、廃城後八十年ほどならば、手入れがなくても外側の大きな城壁は相当に形を保っていたであろう。これを知る貴重な記録がある。この戦いより二十年後、付近を通りかかった長春真人一行が記した、「長春真人西遊記」である。その部分を原文から訳すと、「東西の方向にいくつかの故城遺跡がある。建物の基礎跡は新しく見え、大通りと路地が見分けられる。漢土の物に似た作りである」とあり、拾った瓦から契丹の故城と推定している。この部分をもっと分かりやすく書くと、「二、三の廃城が東西に並んでいる。中に入って見ると建物はないが、その残骸などが片づけられて土台の形がよく見える。路面が土むき出しなので、大小の街路も明瞭である」となる。もしも、城内部の建物が崩れた形で残り地面に草が生えていれば、中を古く感じただろう。書かれてはいないが、そういう城も道中でいくつか見て来たのではなかろうか。でもこの故城はそうではなかった。中は新しい、即ち最近まで使われていたような感じがして意外に思い記録に残したのだ。このような状態は、植生の回復が遅いモンゴリアの環境によるものだろう。人や家畜が頻繁に同じ所を通行して地面を踏み固めると裸地になって長く続く。即ち、長春真人一行からさほど遠くない以前に城の内部が片づけられて、人や家畜が充満した状態がある程度の期間続いたことがあったのだ。使用された形跡のある城は確かにあったのである。この戦いで用いられたものと断定はできないが、元史と録に言う塞であってもおかしくない。

三つの城の発掘平面図を見ると、一番東寄りのオラン・ヘレムの構造がもっとも防御が堅固で、まさに要塞である。漢語で防州と呼ばれていたものではないかと想像される。なお、主城とみなされるチン・トルゴイ遺跡のチンは、鎮州という当時の呼び方のチンが残存しているものではないかとの説もある。そうであれば、現在オラン・ヘレムと呼ばれるのは、元史と録にアラン塞とあるものの名残であると考えられないこともない。

4.6 ジャムカの行動

既に指摘したように、ジャムカらが戦場において敗れば、逃げるのに精一杯で仲間の部族から略奪する余裕などなかったはずだ。ナイマンとメルキトの敗北を知ったのは、東方の諸部族と共に進

軍している途上であり、本戦には参加できていなかったと考えられる。これも集史に従うと理解ができない。なぜなら、ウルクイ・シルケルジト河近くは、ジャムカやその配下にあるカタギンやサルジュウト氏族にとって熟知の土地であった(9)。ナイマンとメルキトが東方に押し寄せて来たのなら、道案内の為に直ぐに合流し、先鋒となって真っ先に進むはずだ。ナイマンとメルキトも攻撃地点を定めるために、地理をよく知る彼等を絶対に必要としただろう。甲軍が界壕の中に退避していれば、合流を妨げる者もいなかったはずである。これによっても、QJ 嶺中での戦いは否定される。

なぜジャムカ達が乙軍本体と合流できなかったかといえば、その間にある甲軍の本拠地に阻まれて進軍できなかったからである。東に住む彼等は、ナイマンとメルキトに向かって少数の使者を往来させることはできたが、規模の大きい戦闘部隊としては移動できなかったのだ。元史にあるように、メルキトとナイマンは合流したが、東方部族等とは協力を約束しただけだったと考えるべきである。ジャムカ等が加わらないと数がものを言う本戦には好ましくないが、甲軍を挟み撃ちにできる利点がある。甲軍は北方に想定される戦場に兵力を集中したいが、そうすると後方に位置する輜重部隊、即ち家族財産が東からやってくるジャムカ等の攻撃にさらされる。以前、この戦いの相手であるナイマンのブイルク領に侵攻した帰り道に、そこを攻められてオン・カン軍が痛い目にあったと各史書は記している。東からやって来るジャムカ達に同じような攻撃をされたら困る。本戦場にできるだけ兵を振り向けたいが、後方の守りもおろそかにはできない。そこで、オン・カンの家族や財産を塞に避難させ、入り切らないテムジンのもは目立たない他所に隠した。こうやって後方の防衛兵力をできるだけ減らしながら安全を保ち、かつ、ジャムカ等の注目を塞に集めて、彼等が北方へ進軍するのを遅らせようとしたのだろう。塞で戦いの計画を練った、と録にわざわざ書かれている理由がこれだっただろう。「塞を壁とした」とあるのは、ジャムカ達とナイマン、メルキトの主力を分断するための象徴的な意味の壁であって、壁のような塞に逃げ込んだのではない。両軍とも野外決戦を考えていたのだ。

この後ジャムカは直ぐに甲軍の元に行き許しを請うて受け入れられた。味方部族から略奪したものを差し出して詫びの印としたのだろう。それが受け入れられたということも、彼らがほとんど戦っていないことが証拠である。実際に戦場で矢を交わしていれば降伏しなければならず、簡単に許されるはずがない。

4.7 戦闘の描写

どの史書でも、本戦闘の最中に風を祭ったとの記述がある。敵陣へ風が吹くように祈ったところ逆風雪になって自らを壊乱させ、これが乙軍の敗北の原因となったことが戦いのハイライトとして描かれている。しかし、乙軍が敗走するときの描写には違いがある。集史以外は、激しい吹雪に遭い、雪で埋まった谷川に落ちて兵が死んだ、である。集史は風雪でクイテンの地におしこめられたようになり、寒さで兵の手足が凍って人畜もろとも高所から転がり落ちたとする。そこがクイテンの地であった。川と山とまるで違う場所である。集史の表現は、二年後のタヤン・カンのナイマンとの戦いでも同じようである。「ナイマン軍は戦勝者の追撃を受けて、ナク嶺の最も峻険な部分へ散り散りになり、暗夜絶壁の麓に墜落して多数の人命が失われた」とある。この部分の表現は他書も

同じだが、クイテンの戦いは、兵が逆風雪にあって川に落ちて負けた、と明瞭に書き分けている。集史は主将の異なるナイマン相手の二つの戦いの区別が付いていない。

4.7 甲軍と乙軍の移動

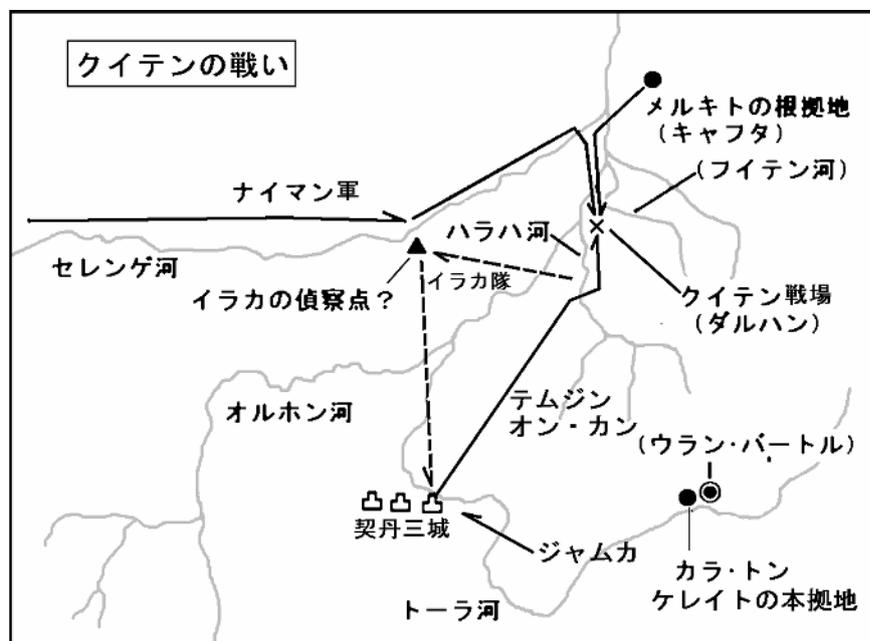
集史の記述のように、QJ 嶺に向かってナイマンとメルキトが彼等の本拠地から遠征して来たというのは極めて唐突に感じる。長い遠征距離をどのような経路で移動して来たのかについて集史は全く触れていない。メルキトが東に移動しようとするれば、水草に恵まれて地形も良い甲軍の本領を通るしかないが、メルキトはこの戦いの前にテムジンに二度も負け、オン・カンにも国内深く踏み込まれて、カンであるトクトアは遠くバルグジン地方に身を隠したような有様であった。それが急に元気になって進軍したとすれば、甲軍の本領には兵があまりいなかったことになるが、そんなことが信じられるだろうか。遠征にも資材食料が必要だが、メルキト部族は疲弊しており、そんな力はなかったと思われる。頼るような相手も近くに居ないメルキトは、同じ負けていたにせよ、まだ余裕があったブイルクのナイマンに援助を求めたのだろう。それを甲軍は早期に察して、テムジンは戦争に不向きな春にタタルを討って東方の憂いを消し、秋に予想された乙軍相手の戦いに備えていたのだろう。この戦いにおいて、「タタル部族が遺棄する物資に立ち止まることなく追撃せよ」との命令を出しており、それに反した親族を厳しく罰した事が特記されている。早くこの戦いを終結させて、秋に向かって軍備を整え直す必要性を痛切に考えていたからではなかろうか。同時期にオン・カンはアラン塞の準備や高山での偵察を行っていたのであろう。このような状況の中でも、夏になるとオン・カンは金朝への挨拶や交易のためにウルクイ・シルケルジト河地方に向い、テムジンと合流していたのだろう。その時にセレンゲ河を伝ってナイマンが行軍しているとの情報を得て、すぐさま本拠地方面に帰ったのに違いない。その情報は騎馬を乗り継いで行われるジャムチのような駅伝制度の可能性もあるが、透明度の高い気候と視力に優れた者の多い遊牧民の組み合わせならば、狼煙による伝達が最も適していたであろう。ナイマンがやって来た事とその概数ならば数日で届いたはずだ。それを知ってテムジンとオン・カンは通い慣れた道で自領に帰ったのだ。こう考える方が、ナイマンとメルキトが甲軍の領土を通過して東へ進軍して来たと考えよりずっと自然である。甲軍が自領に帰るのはあまりにも当たり前なことなので、元史も録もあえて書かなかったのだろう。

5 クイテン戦場の位置

以上の考察により元史と録が正しい記述をしており、QJ 嶺で戦いがあったとする集史の記述は誤りであるとの結論に達した。ではクイテンの戦場の位置はどこにあったのか。それは契丹の三城とメルキトの根拠地であったキャフタを結ぶ線上にあったに違いない。そう見て行くと、現在の工業都市ダルハンの北方にフイテン河(10)があった。ダルハン自身も **Khuiten** の別名を持っていた(11)。この市の中心からフイテン河までの草原地帯がクイテン戦場であったとの結論になる。戦いにおける各軍の行動を図1に示す。西に流れるハラハ河は、録でテムジンがメルキトと戦ったとある哈刺哈河(ハラハ河)であろう。これらの河がナイマンとメルキトの兵が落ちたと言う河である

う。又この近くには鉄山があり、メルキトと甲軍の常に衝突する境界地帯であった(12)。Khuitenと名のつく地名はモンゴルに多いようであるが、本論考の推測に合致するのはダルハンである。

図1 クイテンの戦における各軍の動き



6 集史が記述を誤った背景

では、集史の記述はなんであったのか。そもそも集史が編纂されたのは、中東に移住して半世紀近く経ったモンゴル人たちが自分たちの歴史や故土を忘れかけ、団結力も薄れようとしていたのをガザン・カンが憂慮したからであった。史書により自分たちの本源を深く知り、一体感が高まることを期待したものであった。編纂には元史や録とそれ程変わらない原資料によったのではないかとされているが、モンゴリア内部の地理認識や戦いの記憶が薄れていたために理解が難しかった部分もあったのだろう。この部分もそうであり、他書と同じく、ウルクイ・シルケルジト河から移動した後の戦いとだけ記述されていた。具体的な場所が分からなくなっていたので、山の名が多く出て来るから、河の近くで名を知っていた QJ 嶺が戦場だと思い込み、アラン塞や壁が出て来るので金の界壕のことだと判断した。イラカがいた高い山に登るには QJ 嶺の森を抜けただろう。それを攻められなかったのだから界壕に拠ったのだと解釈した。クイテンも地名と認識するより、「寒い」という原義に従い、厳寒の地と理解して全体をまとめあげたような感じがする。

7 諸山の位置

改訂二版では諸山の位置を不明としてきたが、その後の研究で、エネゲン・グイレトゥ山は現在のバヤン・フタグ山 47.2N111E、チェックテル山はイフ・ツァガン・オンドル山 47.8N113E、チ

クルグウ山はバルーン・マタド山 47.0N115E であろうと考えられた (13,14)。ケレイト領からの信号を、ケルレン河を経てウルクイ・シルケルジト地方に伝達するテムジン領内の狼煙通信の拠点だったと思われる。

8 アラルの位置

戦いの後、甲軍はアラル（島）付近に駐屯したと集史にある。その島は下図の白丸で囲った部分であろう。有名なケルレン河のCODEE・アラルと同じように、トーラ河の本流と分流とで周囲を完全に囲まれた島と言える土地である。正にそこにオラン・ヘレム、本稿でアラン塞と推定した遺跡がある。即ち、乙軍を打ち破った後、輜重を置いていた所に甲軍は戻ってきたと集史は述べているのである。島といっても日本のように豊富な水のある河が取り巻いているわけではないが、冬の凍上で谷地坊主が出来て足場の悪い土地なのであろう。外部からの取り付きが良くない事も防御力をたかめるので要塞を設置する理由になったと考えられる。集史の記述は全体として見れば誤りだが、アラルに帰ったという部分は正しかったことになる。地図を見るとオラン・ヘレムの東 2.5km ほどの所の、河の真ん中にも同じような形の城跡のような物が見える。何であろうか。

図2 トーラ河のアラル



9 今後の課題

ダルハン市の別名がフイテンであることと、戦場にふさわしい地形であるかについては現地での確認が必要である。又、戦場で吹き荒れた考えられる南寄りの風雪が、どの季節にどの程度あるものかということ、更に、塞の内部が人や家畜で踏み荒らされた場合、どの程度の期間裸地であるのかについても専門的な見地から確認する必要がある。また、集史の兀惕古の地名が兀惕吉の書き誤りであり、秘史のウトキアだったとすれば、ダルハンの南数十 km の範囲内にあるはずである。塔察儿-阿合もその付近と言えないこともない。アブジア・CODEグリは冬営地だったので、当時のテ

ムジンの拠点、現在のアウラガ遺跡そのもののように思えるので、別に述べる。

10 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房、東京

：村上正二(1970)「モンゴル秘史1, 2, 3」平凡社、東京

『集史』：『史集』(1983), 商務印書館、北京

：ドーソン著, 佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史1」平凡社、東京

『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局、北京

『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注, 文求堂蔵版(1910), 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『長春真人西遊記』李志常：『十六国春秋』に収載の一(1966), 台湾中華書局

<研究書>

(1)吉田順一(2007-2009)「クイテンの戦いの実像」早稲田大学モンゴル研究所紀要(4)-(5),
107-117頁

(2)松田孝一(2015)「チンギス・カンの国づくり」：白石典之編『チンギス・カンとその時代』
第1章, 勉誠出版, 東京

(3)白石典之(2001)「チンギス=カンの考古学」62-67頁, 同成社, 東京

(4)外山軍治(1964)「金朝史研究」巻末年表32頁, 同朋社、京都

(5)安田公男(2017)『『金史』に現れる人物障葛について』松田孝一編「13-14世紀モンゴル史研究」、
2号, 科研費助成金による実績報告書(課題番号26284112), 81-83頁

(6)外山軍治(1964)「金朝史研究」421-442頁, 同朋社、京都

(7)白石典之(2001)「チンギス=カンの考古学」21-24頁, 同成社, 東京

(8)千田嘉博(2009)「契丹城郭の比較研究」：天野哲也等編「中世東アジアの周縁世界」(2009),
コラム11, 同成社, 東京

(9)外山軍治(1964)「金朝史研究」490頁, 同朋社、京都

(10)森安孝夫・オチル編「モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告」, 科研費助成金による実績報告
書(課題番号08041014), 16頁

(11) Khuiten のネット情報：<http://mn.geoview.info/darhan.2031963>

Darhan is a populated place and is located in Selenge, Mongolia. The estimate terrain elevation above sea level is 890 metres. Variant forms of spelling for Darhan or in other languages: Kuitun, Darhan Suma, Urton Kuytun, Darhan sumu, Khuiten, Darkhan, Khuyten, Darkhan Sume, Darkhan somon, Darhan, Darhan, Darhan Suma, Darhan sumu, Darkhan, Darkhan Sume, Darkhan somon, Khuiten, Khuyten, Kuitun, Urton Kuytun.

Latitude: **49°37'0.01"** Longitude: **106°20'59.99"**

(12)白石典之(2001)「チンギス=カンの考古学」68-71頁, 同成社, 東京

(13)安田公男「チンギス・カンの前半生その2、父の死」8-9頁, [URL:chinggis-ff](#)

(14) 安田公男「モンゴル史の地名その1、チクルク山の位置」[URL:chinggis-ff](#)

9 改訂履歴

2017年11月22日 初版作成

2018年4月30日 改訂1版 禹儿楊の解釈を改めたほか、一部の語句を修正。

2018年8月21日 改訂2版 山名が狼煙通信の拠点だった可能性を追加。

ジャムカの行動について説明を若干追加。

他、いくつかの語句、表現を修正。

2019年11月11日 改訂3版 明らかになった山名と、集史記載のアラルの位置を追加。